

(株)海洋探査海を守る「石詰め礁」

これが特許

石詰め礁



海中にいるナマコなどの浮遊幼生を沈着させるためのもの。網袋に石を詰めた構造になっており、水槽内で幼生を付着させたカキ殻をセットして使う。



鳥牧村の原歌漁港に設置された石詰め礁に群がるメバル。200尾ほどが観察された。



代表の角田さん。数年前までは自身もダイバーとして第一線で活躍していた。

水産 産試験場や漁協の委託を受け、海産物の資源量などの調査を行っている小樽の株式会社海洋探査。

同社でナマコやアワビなどの人工種苗の保護育成の基盤として開発されたのが「石詰め礁」だ。網袋に石を詰めたもので、構造はいたってシンプル。

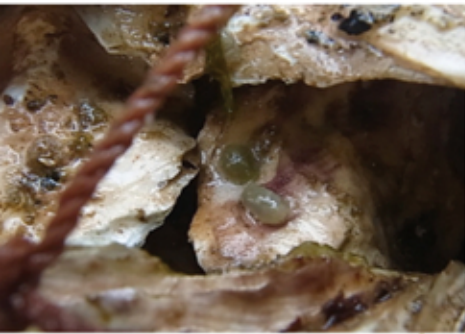
開発のきっかけは、より低コストでナマコの養殖ができないか、という発想だった。水槽での養殖では、餌やりや水質の管理などの手間は避けられない。しかし石詰め礁を用いれば、人工的に行うのは水槽内で幼生をカキ殻に付着させることと、石詰め礁を設置することのみ。あとは、海中の環境

で自然にナマコが成育する。

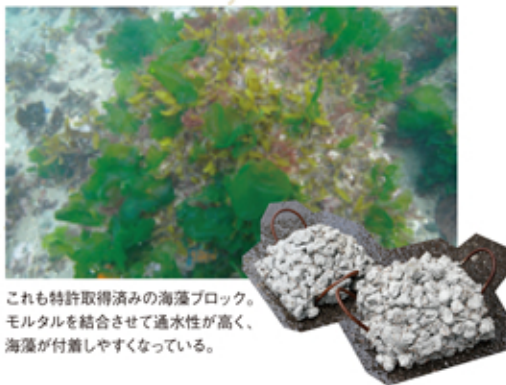
もう1つのメリットは、簡単な構造に由来する。従来は海中に沈めたコンクリートブロックによる養殖が試みられていたが、重量があるために海底の砂泥に沈んだり、設置や移動に重機が必要となりコストがかかることが難点だった。その点、石詰め礁なら持ち運びが簡単で、漁船から設置することが可能だ。このため、漁業者の利用だけでなく、住民が参加する海の保全活動にも活用されている。そのほか、河川に設置してニホンザリガニの住みかとするなど、その使い道は大きく広がっている。

知財総合支援窓口のサポートを受け、特許を取得している。「構造は簡単だけど、サイズや中に詰める石の形状、網袋のしぼり方など、製品化までに多くの試作がありました。そうして積み上げたノウハウを、無駄にしたいくなかったです」と言うのは、同社代表取締役の角田博義さん。その言葉からは、他を排除したいのではなく、私たちの財産である海をみんなで守りたい、という意図が伝わってくる。

「今の環境をうまく利用することが私たちの目指す先。そのために開発したのが石詰め礁なんです」。知財の活用は、日本の海を豊かにすることにもつながっている。



引き上げられた石詰め礁のカキ殻上で、成長が確認された稚ナマコ。



これも特許取得済みの海藻ブロック。モルタルを結合させて通水性が高く、海藻が付着しやすくなっている。



取材協力
海洋探査
小樽市長橋2丁目10-7
☎0134-25-1730